

1. 総評

今まで語彙学習は、学習者が自ら資料を調べて暗記するという学習法に委ねられる傾向があり、文法や音声領域に比べ日本語教室ではあまり取り上げられていなかったことは事実であろう。それで、学習者は母語直訳に依存したり、限定的な意味のみ覚えたりして、母語とは異なる意味領域を持つ多義語の様々な意味を理解することに困難を感じる人が大勢いる。しかし、コミュニケーション能力の育成が第二言語習得（SLA）の中心になった今日、様々な語彙をその場に合わせて適切に駆使する能力は、以前よりさらに一層求められている。

『日本語多義語学習辞典』（以下「本書」）は認知意味論を援用し、多義間のつながりを示し、その拡張要因を説明しながらイラストで分かりやすく提示している。学習者がただ並べられている意味を覚えるだけでなく、意味拡張の構造を理解し、その言葉が持つ様々な用法を適切に使えるようになることを目指していることがわかる。また、関連語句、その動詞と共にしやすいオノマトペ、文化的知識に至るまで、当該動詞に関わる情報を網羅しており、ただの語学辞典ではなく、「百科事典」のような役割も果たしているように思われる。このような点から、うまく使えば中上級の学習者はもちろん、日本語教師にも大変役に立つものと思われる。

ただし、こうした認知意味論的な意味の説明には、少しずつ意味が拡張して生じた多様な意味の中でどれがプロトタイプかを認定することや、どこまでを一つのカテゴリーにまとめるかといった区切りなどが問題となる。プロトタイプの認定の場合には、具体性、頻度などを考慮すれば、母語話者間で異論なく決めることが可能かもしれないが、意味のカテゴリー分類に関しては、より綿密な検討が求められると考えられる。本書をレビューした結果、以下の点を再検討していただければと考える。

第一に、意味カテゴリーの分類において、異なる分類、区切り方ができるのではないかと思われる動詞も結構見受けられた。語義数がそれほど多くないものであればいいが、10以上の語義を持つ多義動詞に関しては、提示された分類でよいか、より多くの日本語話者の意見にも耳を傾けながらまとめる必要があるだろう。

*本研究は、文部科学省の科学研究費基盤研究(C)「基本多義動詞・形容詞の意味ネットワークとその習得・教育に関する実証的研究」（平成25～27年度、研究代表者：森山新、課題番号25330168）の助成を受けて行われたものである。

第二に、語の意味拡張と語句としての意味拡張が混ざっているところがあるように感じられた。例えば、「下す」項目の場合、[1]「閉める」(p. 119)の例文として「ブラインドを下した」、[1a]「終える」に「シャッターを下す」が載せてある。ここで「シャッターを下す」が「店の営業を終える」になるのは「句」としてメトニミー的な拡張を介しており、「下す」自体は「具体的な対象を下のほうに移動する」の意味であると思われる。これは別途の項目を立てるより、[1]の慣用表現と考えたほうがよいと思われる。このように句での意味拡張が動詞の語義の拡張になっているものがないか検討が必要である。

第三に、似ているような意味にもかかわらず文型が異なる場合である。例えば、「当たる」の[3][4](p. 56)の意味は視点の変化によって[3a][4a]がついているが、「視点の変化」「主語による移動」などによって意味を分けるより、1つの意味の下に2つの文型が可能であるというようにしたほうが意味を中心とした辞書の主旨に合致し、わかりやすいのではないかと思う。こうした文型による意味の区切りをどのようにするかについても検討する必要があると思う。

2. 構成について

以下、「本書の使い方」の項目に従い、その目的が達成されているかについて、評価すべき点、改善すべき点を示すことにする。

2.1 使用頻度

今回は約2か月にかけて最初から最後まで通読した。普段は年に3回ぐらい参考にしていたと思う。主に自身の論文を書くときや、他人の語彙の意味に関する論文を読むときの参考資料として利用した。

2.2 語の種類

動詞104語はすべて日常での頻度が高く、様々な用法をもつ多義語で、このように解説してくれる資料があるのはよいことであると思われる。ただし、学習者の立場からいうと、語数が少なく、知らない言葉に遭遇したとき手に取るような辞書ではない。いざと単語を引いてみても出ていないことが多い。むしろ知っている語の新しい用法や見直しに向いていると思われることから、辞書というよりは学習書として有効であろう。

2.3 見出し語・動詞の種類・見出し語のレベル

見出し語の下に動詞のグループおよび自他、対応する自他動詞の情報が書いており見やすい。見出し語はほとんど初級から導入される基本動詞であるが、例文や関連複合動詞、

慣用句などは中級以上のものなので、この辞書自体は中上級向けであると思われる。この語に初めて接した学習者には難しい内容であるが、中上級の学習者であれば、これくらいのレベルの動詞は知っていると考えて、見ない可能性もある。

2.4 漢字・読み

意味によって使われる特別な読みの漢字まで表示されているのは評価に値すると思われる。しかし下の音読みは「動詞」とは関連が少ないのでなくてもよいのではと思われる。

2.5 ネットワーク図

基本義と派生義との関係がわかりやすく示されている。ただし、できれば具体的な用法から抽象的な用法の順に整理したほうがよいと思う。ほとんどそのようになっているが、そうでもないものも見受けられた。また、「開始のかかる」(P. 135)などの文法化されたV2が1つの意味項目になる場合は、もっとも後ろに載せたほうがよいのではないかと思われる。「行く」(p. 66)も[1]が「死ぬ」の意味になっているが、後ろに移動させたほうがよいと思われる。

2.6 語義

簡単な言葉でうまく説明されていると感じた。いくつかのところについては検討の余地がある。P. 63の「生きる」に関して「死んでいない」となっているが、語義の説明に否定は使わないほうがよいのではないだろうか。

2.7 語義の英韓中国語訳

語義に訳をつけたことはよいと思う。韓国語の訳語にはあまり問題は見出されなかった。

2.8 上位概念との関係

「～から」の形を取っているものが多い中、「する」文で終わっているものもある。「できる」の[2](p. 314)は「作物が生じるように実るから」となっているのに対し、[3](p. 315)は「用事が生じるように時間が生じる」となっている。どちらかに統一したほうがよいであろう。また、納得のいかない説明、理解しにくい説明がいくつか見受けられた(具体的には、書き込みを参照のこと)。

2.9 例文

よいと思う。いくつかの項目に慣用句のみの例文があるが、それについては見直してはどうか。また、「さす」[6 刺激する]の例文に「肌を刺すように冷たい風が吹いてきた」があるが、これは直喩であるので、「さす」の意味の拡張であるか曖昧である。できれば、直喩でない例文を載せたほうがよいと思う。

複合動詞などの場合、複合動詞にも意味拡張が起きて、それがもとのカテゴリーに合わなくなる場合がある。「消す」の[0]にある「もみ消す」(p. 183)で、②「スキャンダルをもみ消す」は[0 消火する]の意味には合わないのでまぎらわしい。

2.10 合成語・慣用表現

上級の言葉が多く、説明も難しいものが多い。絵があつたらよいと思われる。各語義のイメージのイラストと区別して、小さなイラストを入れてはどうだろうか。

2.11 イラスト

分かりやすくなっているが、所々説明と矢印の方向が合わないものがある。「押す」の[2]は「上からの圧力」になっているが、[2b, c]は横からの圧力なので、さらなる工夫が求められる。

2.12 関連語句

本文で扱えなかった合成語などを集めており、便利だと感じた。

2.13 オノマトペ

興味深い項目で、参考資料として載せてもよいと思ったが、動詞の意味の理解に直接的に役立つとは考えにくい。その動詞の意味が知りたくて当該項目を見ている学習者には余分な情報かもしれない。

2.14 用法ノート

似ているような動詞の説明は学習者がもっとも必要とするものなので必要な項目である。例文などを入れてより詳しく書いてもよいのではないだろうか。

2.15 文化ノート

最近、こうした文化的な側面が強調されており、その背景などが分かれば言葉を覚えるにも役立つと思う。内容もいいが、「浮世絵」「振袖」などは分かりやすく写真かイラストがあってもよいのではないか。

3. その他

認知言語学的観点を用いた辞書として新しい試みであるが、辞書としては言葉の数が少ない。辞書というより、むしろ参考書としての性格を持っていると思われる。練習問題などを入れて、勉強した内容が確認できる本格的な学習書にしていってはどうだろうか。